

# お子さん、お孫さんたちへの“読み聞かせ”のすすめ

ロシア語 1962年卒 渡辺晋太郎

## 動機

かつてどこの家庭でも母親や年上のきょうだいが幼い子どもたちに本を“読み聞かせる”姿が見られましたが、この頃ではめっきり少なくなりました。このことによって、「倫理観」、「他人に対する思いやり」、「いたわりの気持ち」等が子どもばかりでなく、大人の間でも希薄になっていったのではないかと思えるのです。そう考えると、50年前にはなかった陰惨な「いじめ」、「親子間の殺傷」、「赤ちゃんの捨て去り」などの問題が、なぜこうも頻繁に起こるようになったかが頷けるような気がするのです。些細なことに思えるかも知れませんが、もう一度、家庭で、学校で、社会で“読み聞かせ”の習慣を復活できれば、「人間の心の暖かさの交換」ができるようになり、希薄になっていた他人に対する「思いやり」や「いたわり」の気持ちを取り戻せるように思うのです。お互いに忙しくされていると思いますが、まずは、私たち自身の子どもや孫に対する“読み聞かせ”を始めませんか。その案内役を務めたいと思います。

## ● 前説

私は、年甲斐もなくテレビっ子です。1日の平均視聴時間は4～5時間。朝、新聞が届くと真っ先にテレビの番組欄に目を通します。ドラマ、音楽、ドキュメンタリー、解説、スポーツ、アニメ、教養番組、語学番組まで探し回って、時間の都合で見られない番組、時間帯が重なっているために見られない番組、長期保存して教材に使いたい番組などを片っ端から録画予約していきます。

さて、年賀状の配達がほぼ無くなり、日常生活が落ち着きを取り戻しつつあった平成27年1月9日の夕方のことでした。たまたま目が合ってしまった語学番組に付き合っていた時のことです。番組の講師・貝澤 哉先生が、サンクトペテルブルクにあるマールイ劇場の演出家、レフ・ドージン氏にインタビューしているシーンが映っていました(\*1)。私は、物静かに語りかけてくるドージン氏の言葉の虜になって、その講座が終るまで見入ってしまいました。彼の主張は、ほぼこうでした。「今の演劇は危機的な状況にある。役者も監督も観客との交流が希薄になり、演目の選択にしてもニーズ調査や需要予測といった、大いなる偽りによって決められるようになった。そうではなくて、自分の頭で考え、新しいもの、感動するようなものを提供すべきなのに。」

私は、ドージンさんの感じている危機は、コミュニケーションの危機につながる問題だと感じました。また、そのコミュニケーションの危機を乗り越える手段の一つが“読み聞かせ”の復活・普及だと直観しました。つい最近、「“読み聞かせ”を通して学ぶ子どもたち

ちの異文化理解活動」というイベント(\*2)を終えたばかりだったからかも知れません。

## ● 昔は“読み聞かせ”がどこの家庭にも学校にもあった

団塊の世代及びそれ以前に生まれた人たちにとって、幼いころの思い出の中に、母や祖母や兄または姉から本を読んでもらった記憶がきっとあると思います。炬燵の中で、寝床の中での懐かしい記憶です。学校に上がったからは、紙芝居屋の打ち鳴らす拍子木の音がありました。草野球に夢中になっていた子どもたちも、缶蹴り遊びをしていた子どもたちも、この音を聞くと年長の子が「タイム！」と叫んで、一斉に紙芝居屋の自転車目指して走り寄り、ワイワイ言いながら、おじさんのセリフの一言ひとことに耳を澄まし、ストーリーの展開に胸をときめかせたものでした。紙芝居は“読み聞かせ”範疇のイベント。子どもたちをつなぐ共通のメディアだったのです。

学校でも時々、国語の時間の一部を割いて、担任の先生が“読み聞かせ”をしてくれました。たいてい隣のクラスとの合同授業でした。子どもたちは、ワイワイ言いながら、長い物指を片手に「怪傑黒頭巾」を読んでいる先生の雄姿にわくわくしたものでした。

要するに昔は、家庭でも、学校でも、身近に“読み聞かせ”がありました。食べる物も着る物も乏しく、暖房も不完全な生活環境でしたが、親たちには、向こう三軒両隣の人たちとの味噌や醤油を貸し借り出来る深いコミュニケーションがあり、子どもたちは、先生や級友や草野球仲間たちと信頼感や仲間意識でつながった深いコミュニケーションがあって、だからナイナイ尽くしの経済状況の中でも助け合いながら生きてこられたのでしょう。その頃は、「いじめ」という言葉も、そう呼べる事件も聞きませんでした。

## ● “読み聞かせ”は日本人の生活文化だった

「コミュニケーション」を辞書で探すと、「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」という説明が載っています(\*3)。

コミュニケーション学は、学際的な分野であるためか、さまざまな定義があるようです。ある書物では、1950代から1970年代前半にかけて出版された研究書、研究論文、辞書・百科辞典から引用された定義が126もあったことを紹介しています(\*4)。

私は、故斎藤美津子博士から聞いた生物学者、M・スワンソンの定義が一番腑に落ちます。それは、コミュニケーションは、空気、水、食べ物と並んで、生命を支える4番目のリソースだということです。彼女は、猿の親子を使った観察を通して、コミュニケーションが不足すると欲求不満が起こり、最後には自らの命を絶つところまでいってしまうことを突き止めました(\*5)。M・スワンソンは、「コミュニケーションは、人間の心の暖かさの交換である (Communication is an exchange of human warmth.)」とも言ったそうです(\*6)。「心の暖かさの交換」こそ、ヒューマン・コミュニケーションの本質なのだ納得してきました。

さて、“読み聞かせ”に戻りましょう。これは、日本人の誇るべき生活文化だと思います。“読み聞かせ”が庶民の間に広まるにはいくつかの条件が必要です。一つはふさわしい作品がたくさんあること、二つ目は、高い識字率、三つ目は比較的安価に本を入手できるくらいに出版・販売ルートが整備されていることです。日本の場合、これだけの条件がそろい始めたのは室町時代の後期だったのではないかと思います。お伽草紙が作られ、流行し始めたからです。お伽草紙は、話し言葉で書かれたものが多く、読み物であると同時に、話すもの・聞くものでもあり、また絵だけを楽しむこともできました。

戦国時代を経て江戸時代に入り元禄時代を迎えるころになると、井原西鶴、近松門左衛門など作家が多数現れました。浮世絵が盛んになったことで多くの本が多色刷りで出版されるようにもなりました。更に文化文政時代に入ると、庶民の教育機関ともいべき寺子屋が雨後の竹の子のようにつくられ、江戸時代末期には、武士は100%、庶民層でも男子の半数は読み書きができたようです。同時代のイギリスでは、首都ロンドンに限っても下層庶民の識字率は10%程度だったそうですから、日本人のそれがいかに突出していたかが想像できます(\*7)。

以上、三つの条件がそろったからでしょう。“読み聞かせ”は開化期以後の日本人にとっては、娯楽であるとともに、教育・教養、倫理観やマナーを身に付ける大切な生活文化になったのだと思います。東日本大震災の際に現地を訪れた多くの外国人たちが、日本人の互いに思い合う優しさや譲り合いの姿を見て驚嘆したというニュースを聞きましたが、その背景には何代にも渡って行われた“読み聞かせ”によって培われた倫理観があったのだと感じました。

ところが、戦後、家族制度が大家族制度から核家族制度に変わりました。やがて高度経済成長期に入り、女性の高学歴化や社会進出等が進むようになって、鍵っ子が増え、多くの家庭に“読み聞かせ”ができるようなゆとりがなくなってしまいました。誤解しないでください。女性を非難しているのではありません。社会の構造や状況が変化したことを言っているのです。

しかし時代が変わっても、小さい子どもたちは、本を読んでもらうことが大好きです。我が家でも幼稚園が休みになると孫たちがやって来ます。ほんの数日間の滞在の中でもそれを感じます。文字が読めないのに、読んでもらった話を一言一句、「、」や「。」の位置まで暗記しているのには驚かされます。“読み聞かせ”は、現代でも、世代間コミュニケーションの重要な手段です。「人間の心の暖かさの交換」そのものです。何とか、これを再び日本文化の核として復活できないものでしょうか。

## ● 日本人にはとりわけ「深い、暖かいコミュニケーション」が必要な理由

文化人類学者、エドワード・T・ホールは、コミュニケーションの観点から世界の文化の特徴を調査・研究し、日本の社会を「高いコンテクスト」(以下「高コンテクスト」)の社会に分類しました。彼は、「コンテクスト」と言う言葉を「社会的に共有されている情

報」と言う意味で使っていると言っています。ちなみに、地中海沿岸地域を除くヨーロッパや、北アメリカ地域の社会を「低いコンテクスト」（「低コンテクスト」）の社会に分類し、両者は対照的だと言っています。彼は、高コンテクスト社会では、「社員は絶えずお互いに接触し合い、共通の空間に働き、お互いに相手のオフィスにせわしなく出入りし、電話がいつも鳴りっぱなしという状況にある。誰もが事情に明るく、どんな話題では誰が一番情報通であるかを知っている」と解説しています。他方、低コンテクストについては、「それぞれの活動がお互いに妨害し合わないよう、きっちりした日程を組み区画化する傾向にある。外から見ると、厚い壁、二重ドア、…何事でも情報の流量を減らそうとしているかのようで、これは我々が研究した日本人の組織とは正反対である」と言っています(\*8)。日本人の場合、高コンテクストの中で生きているので親密なコミュニケーションが欠けてくると、心身に変調をきたすケースが多いと言われると納得できます。オフィスのレイアウトにしても、なぜ大部屋主義なのか分かるような気がします(\*9)。

日本の文化が高コンテクストなのは、神話の時代から稲作農民だったことと無関係ではないという話を聞いたことがあります。稲作は、田植えから収穫まで、水の管理や草取りなど村人全員が協力してやっていかなければならず、構成員には奉仕と寛容をベースにした長期間の協力が求められる社会だったことと無関係ではないということなのでしょう。

これは上記と比べれば派生的なことかも知れませんが、一昔前までの住居の構造、育児の仕方などとも関係があると感じています。まず住居ですが、基本的にはどの部屋も多機能的に使われるレイアウトになっていました。すべての部屋は畳敷きで、部屋と部屋とはいつでも取り外しできる襖で仕切られていました。夫婦の寝室を除けば、居間にでも客間にでも、襖をはずせば隣組の寄り合いにでも使えました。子ども毎の専用の勉強部屋なんてありませんでした。今は、違います。少子化の影響もあるのでしょうか、リビングやダイニング・キッチンを除いては個室主義のレイアウトが多いと思います。

子育てにしても、子どもが乳幼児期の間は、母親と寝たり、あるいは眠りつくまでは添い寝をしてやったり、スキンシップの多い育て方をしていました。そして、言葉をしゃべり始める頃になると、お話しや“読み聞かせ”をしてやるようになります。昔は三世代同居が普通でしたから、母親だけではなく、祖母が読み手となることも多かったようです。なぜか、父親や祖父が“読み聞かせ”をしてくれた記憶は、私にはありません。

## ● コミュニケーションの面から「いじめ」の原因を考える

子どもの「いじめ」問題が新聞紙面に登場するようになって何十年が経ったでしょうか。今も増え続けていることが法務省の資料(\*10)からも分ります。また、統計数字の資料が上がってこないものも多数ある筈だということも容易に想像できます。同資料は、質的な面にも触れ、「多様化が進み、情報通信機器の介在により、いじめが一層見えにくくなっている実態」を挙げ、原因について、「その根底には他人に対する思いやりや、いたわりといった人間尊重意識の希薄さがある」と言っています。私は、この記述を前述したコミュ

ニエーションの本質、即ち「心の暖かさの交換」の欠如に附合するものと受け取りました。「心の暖かさの交換」こそ、「いじめ」問題を解決する鍵だと確信しました。

「いじめ」は、子ども間の問題だけではなく、子どもと教師、子どもの保護者間、保護者と学校の間、更に教育界を越えて、職場や老人介護の場へと、止まるところを知らず社会の隅々に広がっているように見えます。

昨年流行した言葉に「絆」がありました。絆とは、語源的には「綱」からきているようですが、人と人との思いやりに満ちたコミュニケーションで支えられる関係を指している言葉だと思います。それが必要だと感じたから、あるいは、それが非常に大切なものだと気付いたから流行ったのでしょうか。あらためて、「人間の心の暖かさの交換」が平穩に暮らしていくためのキーワードだと確信します。

現代人は、程度の差こそあれ、全員、「人間の心の暖かさの交換」が不足している状態にあるのではないのでしょうか。中でも、子どもたちを教育する学校の先生たちのことが心配です。数年前のことになりますが、私は2年間、ある小学校の外国人児童に日本語を教えるボランティア指導員をしていたことがあります。その時、職員室が異常に静かだったことに驚きました。普通の会社のオフィスですと電話が鳴ったり、社員同士が仕事上の報告や打ち合わせをしていたり、前日テレビで見たサッカーの試合結果の感想を述べ合ったり、とにかく、活動する人間同士の声があるのですが、学校の職員室は研究所の実験室の中のような静けさだったのです。先生たちは大丈夫なのだろうかと思いました。「人間の心の暖かさの交換」は、学校の先生たちにも、もっともっと必要なものなのではないかと感じました。

## ● “読み聞かせ” 効果の実例～クシュラの軌跡～

最近になって、人間を取り巻く環境の悪化と経済・社会環境の変化があつてか、様々な障害を持って生まれて来る子どもたちが増えてきたといわれています。「読み聞かせ」は、そうした障害の改善にもが有効である事例が報告されるようになってきました。ここでは“クシュラの軌跡”を紹介するとともに、それが示唆している事柄を考えてみたいと思います。

「クシュラの軌跡」という記事は、最近、インターネットで読んだものです(\*11)。クシュラは重度の難病を抱えて生まれてきたニュージーランドの女の子。生まれた直後から黄疸や痙攣という症状があっただけではなく、体を自由に動かすことが出来ない、目は見えない、耳は聞こえない状態だったそうです。的確な治療法も見つからない、そんな絶望的な状況の中で両親が知ったことこそ、「読み聞かせ」の効果だったのです。クシュラが最も反応を示したのが絵本だったようで、絵本に顔をこすりつけるようにして接しながら、かすかに何かを発見しては微笑んだと記事は紹介していました。

早速両親は、絵本を読み聞かせることを決意し、クシュラが3歳9か月になるまでに140冊もの絵本を読み聞かせたといえます。これが軌跡をもたらしました。知能の成長は不可

能と診断されていたのに、3歳8か月の時の検査で標準以上の知能を持っていると診断されたのでした。専門家たちは、クシュラが絵本の文章を丸暗記したり、絵から感情を読み取るという経験が脳を刺激し、それが軌跡をもたらしたのだと考えたそうです。一連の背景にあったのは両親のクシュラに対する深い、強い愛情であったことは言うまでもないでしょう。クシュラの軌跡は、私たちに様々なことを教えているように思います。

## ●エピローグ

### (1) “読み聞かせ”をどう習慣化するか

お子さんたちに対する“読み聞かせ”といっても、今は昔と違って、いつでも、どこでもという訳にはいかないでしょう。大人ばかりでなく、子どもも、習い事だ、部活だ、塾だと忙しく過ごしている時代です。そうした状況・環境の中で、工夫をし、努力し機会をつくって“読み聞かせ”をすることで「暖かい心を持った人間」に育つチャンスが得られるのだらうと思います。“読み聞かせ”は、習慣化していくことで効果が大きくなっていくのですが、一足飛びに出来るものではありません。はじめは、誕生会だとか、桃の節句、端午の節句、七夕祭り、七五三などの行事を捉えてやってみることをお勧めします。この場合、ビューアーは、お子さんたちのお友だちや年上の兄弟も加わったグループ視聴の形になることが多いかと思います。そうした機会がきっかけとなって、“読み聞かせ”の楽しさを知り、興味を持つようになって、本来のパーソナルな“読み聞かせ”に進化していくことになるのでしょう。最終的なゴールは、一人で読書が出来るようになることです。

### (2) 図書館は宝の宝庫

子どもが興味を示す内容は、年齢によって異なります。2～3歳の子では、色や形に強い反応を示します。4～5歳の子は、乗り物が大好きです。6歳以上になるとストーリーに興味移ります。従って、5歳以下の子ども向けには大型絵本がいいと思いますが、値がはります。小学生向けには日本だけでなく、世界各地の昔話、神話、お伽噺、冒険ものが大好きです。また、小学校高学年から中学生になると、宇宙もの、異常気象や探検もの、動物の親子・夫婦の愛情物語などに関心移ります。読み聞かせに必要な作品は、多種多様であることがお分かりになると思います。しかも、1冊の本のライフタイムは長くありません。子どもの成長が早くて、興味の対象がドンドン変わっていくからです。とても買い切れるものではありません。

そこで地域の公立図書館の出番となります。図書館のメリットは、①書店の何倍もの本が蓄積されていること。紙芝居まで用意されているところもあります。②ただで借りられること（地域によって異なりますが、平均して1回に10冊くらいは借りられるところが多いようです）。③たいてい、児童図書コーナーという部屋が用意されていて、子供向けの本、ビデオ、DVDなどが一か所に

揃えられていること。そして、④何より相談員がいて、本の題名等が分からなくても、こんな内容の本ないでしょうかと尋ねると、パソコンを使いながら本探しの手伝いをしてくれるサービスがあることです。図書館の利用をお勧めしたいと思います。是非、お子さん、お孫さん達に本を読んであげてください。

### <参考情報・文献等>

\*1：平成27年1月9日17:30～17:55、NHK Eテレ「テレビ ロシア語講座」の一部

ドージンさんの所属するマールイ（“小さい”の意）劇場は、250年以上も前にサンクトペテルブルクに造られた劇場で、モスクワのボリショイ（“大きい”の意）劇場と並ぶ名門劇場です。以下に、番組を視聴しながら取ったメモから、レフ・ドージンさんの考え方のあらましをまとめておきます。

--今、ロシアの演劇は、危機的な状況にあります。観客と舞台の交流が希薄になったことで、互いに個性に対する興味が薄れ、人間に対する理解の度合いが落ちています。原因は、俳優でも、大統領でも、タレントでもスタジアムに現れるようになったことにあると思います。500人位の人が集まる、もっと小さな空間に登場するようになれば、（俳優でも大統領でも）観客・聴衆の声を聞くことが出来、お互いの話す内容をじっくり考えることができるようになるでしょう。

演劇に求められるものは、人間性を回復するような新しいものを提供することです。また、演目を決める基準は何かと問われれば、それは、監督あるいは演出家が面白いと思えるかどうかだということでしょう。近頃、大衆の需要を調べたり、観客のニーズ調査をして、その結果に基づいて演目を選ぶ傾向が強くなっていますが、需要予測やニーズ調査の結果は大いなる偽りだと言わなければなりません。なぜなら、観客は、自分が既に見たものの中からのしか、言うことができない存在だからです。ですから、見たこともない新しいもので、感動を呼び起こすようなものを提供すべきなのです。--

\*2 独立行政法人 国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金助成活動「“読み聞かせ”を通して学ぶ子どもたちの異文化理解活動」（平成26年11月29日、「こどもの城」で実施）

\*3 新村 出編『広辞苑』第二版補訂版、岩波書店、1981年

\*4 古田暁監修、石井敏・岡部朗一・久米昭元『異文化コミュニケーション』有斐閣、1987年、p24

\*5 斎藤美津子『話しことばの科学』サイマル出版会、1972年、p4

\*6 日本文化会議編『国際誤解と日本人』斎藤美津子「コミュニケーションにおける誤解と理解」三修社、1983年、p130～131

\*7 [www.nipponnosekaiichi.com](http://www.nipponnosekaiichi.com) 『世界が驚嘆した識字率世界一の日本』。

\*8 エドワード・T・ホール／ミルドレッド・リード・ホール、勝田二郎訳『かくれた差異』メディアハウス出版会、1986年、p39～42

\*9 エドワード・T・ホール／ミルドレッド・リード・ホール、国広正雄訳『摩擦を乗り切

る』文芸春秋、1987年、p94

\*10 [www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04¥00107.html](http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04¥00107.html) 『法務省:子どもの人権を守りましよう』

\*11 <http://www.bookwave.jp/Cushla-teach-me/> [“クシュラの奇跡”が教えてくれる子育てにおいて大事なこと]

#### 投稿者略歴

私は、1962年にNHKに入り、主として事務・管理とか職員研修、ODA関連の研修業務などを担当してきました。そして定年退職後の数年間は、(財)NHK放送研修センターが主催する一般市民向けの「日本語教師養成事業」という、1年間の通学制教育事業をやってきました。そんな関係で、2008年にNPO法人国際日本語コミュニケーション研究所を立ち上げ、今は、「渋谷区子ども日本語教室」の運営に携わっています。生徒数は、平成27年3月1日現在、小・中学生合わせて9か国27名で、小中学校の教員経験者など10名の指導員と1名の教室コーディネーターで指導に当たっています。上記教室は委託事業ですが、ほかに年1回、国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金部の助成による「“読み聞かせ”を通して学ぶ子どもたちの異文化理解活動」を実施しています。